

令和元年度第2回岐阜県総合教育会議 議事録

1 開催日時及び場所

令和2年2月19日(水) 11時00分 ~ 12時10分

岐阜県庁舎 4階特別会議室

2 出席者

知事 古田 肇

教育長 安福 正寿

委員 稲本 正

委員 野原 正美

委員 森口 祐子

委員 竹中 裕紀

委員 近藤 恵里

3 関係者

揖斐川町未来センター会議 衣斐 淳美

垂井町教育委員会教育長 和田 満

県立郡上北高等学校生徒 2名

県立揖斐高等学校生徒 1名

4 オブザーバー

副知事 河合 孝憲

清流の国推進部長 尾鼻 智

副教育長 内木 禎

5 陪席

清流の国づくり政策課長 辻川 和希

教育総務課長 松本 順志

6 議事録

別紙のとおり

議 事 録

発 言 者	発 言 内 容
清流の国 推進部長	<p>これより令和元年度第2回岐阜県総合教育会議を開催する。</p> <p>まず、「小規模校における特色ある取組みについて」郡上北高校から「KCDプロジェクトで郡上の魅力創造・発信！」について発表いただいた後、揖斐川町未来センター会議及び揖斐高校から、「揖斐ジモト大学について」事例をご紹介いただく。その後、意見交換とさせていただきます。</p>
小規模校における特色ある取組みについて	
郡上北高 校 生 徒	<p>2ページをご覧いただきたい。まず、私たちの通う郡上北高校の紹介をさせていただきます。昨年度は70周年記念式典があり、地域からも多くの方が参加してくださり大盛況で終えることができた。生徒はほぼ全員が郡上市民で、その半数は中高連携をしている白鳥中学校出身である。私たち2人も白鳥中学校出身である。今年は今まで取り組んでいた地域協働活動が認められ、文部科学大臣から表彰を受けた。私たち北高生の取組みが評価され、本当に嬉しかった。</p> <p>いま私たちが取り組んでいる地域活動「KCDプロジェクト」の内容は3ページのとおり。KCDとは、北高の「K」、地域を表すコミュニティの「C」発展を表すディベロップメントの「D」の頭文字をとったもので、「北高 地域と共に発展プロジェクト」と言う。内容は大きく4つに分かれており、本日は①～③について、活動内容を紹介する。</p> <p>4ページをご覧いただきたい。まずは地域行事参画であり、地域を活性化するためには、私たち若者が地域活動に参加して盛り上げたり、意見を発信したりすることが大切だと思う。郡上市を良くするためにご覧のような活動に参加している。</p> <p>白鳥町の公民館活動をサポートする公民館応援隊に参加し、子どもたちが楽しめるにはどうすれば良いのかを仲間と話し合った。そして、私たちの活動を地域の方が知ってくださり、今年度は白鳥町以外の様々な地域行事にも参加させていただいている。また、郡上市の後期総合計画の策定に向けて話し合う「郡上みらい会議」では、市内の高校生の代表として北高生が参加し、地域の方と雇用や移住について話し合い、市に提案をした。</p> <p>5ページをご覧いただきたい。11月に兵庫県明石市で開催された「ご当地グルメの祭典」B1グランプリに参加した。これは、郡上市のご当地グルメ「奥美濃カレー」を通して郡上市の魅力を発信する活動である。私がつけているカップは「ばえるカレー」「カレーは飲み物」をコンセプトとした奥美濃カレーの新しい提供スタイルである。紹介パネルや長良川鉄道の模型も作り、多くの人に興味をもってもらえる工夫をした。B1グランプリは多くのご当地グルメが集まっているため、思うように足を止めてもらえないこともあったが、苦労しながらなんとか2日間で約1,700食を提供することができた。多くの人に郡上市を知ってもらえたと思う。B1グランプリで郡上市に興味をもたれ、アルバイト先に奥美濃カレーを食べに来てくれた人もあり、嬉しかった。</p> <p>6ページをご覧いただきたい。地域キャリア教育は、ふるさと郡上市が抱える課題の解決策を、郡上市や企業に提案したり、郡上市の特産品を観光客へ</p>

	<p>発信するために商品開発を行う取組みである。</p> <p>実在する企業から与えられたミッションに対して提案を行うクエストエデュケーションプログラムでは、8つの企業へ新しい商品を提案した。私たちのチームは、大正製薬の「健康と美に関する新商品を提案せよ！」というミッションに対して、「郡上市大和町のどぶろくを使ったどぶろくりームで女子高生の健康と美を守る！」という提案をし、表彰を受けた。</p> <p>また、3年前から郡上市の課題を解決するためのアイデアを出し合う「グッド郡上プロジェクト」に参加し、郡上市に対して様々な提案をしている。写真の梅ゼリーは、東海テレビのニュースでも取り上げられ、道の駅などで販売されている。</p> <p>7ページをご覧ください。私たちはあゆパークと連携することが多くあり、これまで以上に鮎のことを身近に感じている。今年度商品開発をしたのは、鮎ご飯をおにぎりにして冷凍し、食べるときに汁をかけて食べるという「鮎茶漬け」である。実際に文化祭や郡上市のイベントで地域の方に振る舞ったが、素揚げした鮎の骨がアクセントになって好評だった。また、この鮎と米を活用した取り組みは、「郡上美味しい米コンテスト」において、米作り優良活動賞を受賞した。</p> <p>8ページをご覧ください。11月に「グッド郡上プロジェクト」で入賞した提案がまちづくりフェスティバルで紹介された。今年度は、郡上市民が全国平均より運動していないというデータをもとに市民の運動不足を課題と捉え、楽しんで運動をするために市内にウォーキングコースを設けるという提案が入賞した。この案は、実際に市の予算申請がされ、実現に向けて動いている。</p> <p>9ページをご覧ください。地域中高連携は、私たちの出身中学校である白鳥中学校との交流である。各部活動での合同練習や生徒会活動で交流している。</p> <p>10ページをご覧ください。私たちが中学生のときに北高の先輩からExcelを教えてもらったように、私も白鳥中学校の2年生にExcelを教えた。高校生になって教える立場になってみると、高校の授業で多くの技術を身に付けることができた実感できた。</p> <p>今年度は、新たに私たちが取り組んでいるクエストエデュケーションプログラムの経験を活かして、白鳥中学校で行われる「郡上市の防災」をテーマにした授業のサポートを行った。意見のまとめ方を教えることができた一方、私たちも中学生の発想力に刺激を受けた。</p> <p>以上が、本校のKCDプロジェクトの活動報告である。今回の発表以外の地域活動にも多くの生徒が参加している。この活動に参加して郡上市のことを知ることができた。将来、この郡上市に貢献できるようになるために、もっと勉強したいと思う。また、中学時代から北高とたくさん関わってきた。昔は北高の先輩に引っ張ってってもらっていたのが、いまは引っ張っていく立場になり、リーダーシップを身に付けていくことの大切さを実感している。中高連携は、将来、この郡上市を発展させていく仲間たちとのつながりだと思うので、これからも協力して活動していきたい。</p>
<p>衣 斐 氏 揖斐高校 生 徒</p>	<p>(衣斐氏)</p> <p>私は揖斐川マラソンの事務局を本業としているが、傍らで、公民館活動の中で長年中学生の地域参画に力を入れてきた。しかし、中学まで地域で活躍してきた子たちが地域に根差し、ここで暮らしていきたいと思っているのか不安に感じていた。そんな中、ジモト大学を知り、中学生だけでなくまち全体で高校</p>

生も後押しできればと、この企画を進めてきた。

それでは、ジモト大学の紹介をさせていただく。

コンセプトは2つあり、1つ目に、学校では学べない、しかし卒業前に学んでおきたい地域のヒト、モノ、コトを地域の大人と一緒に学ぶ。2つ目に、この学びや地域の大人との交流を通じて、新学習指導要領で求められる「主体性」や「協働性」を学ぶ場を地域で提供する。

2ページをご覧ください。揖斐川町には、住民と職員が町の課題を共有し、未来を描く、「未来センター会議」がある。人口減少対策を考える際、住民は行政に頼ってばかりではなく、もっと主体性を高める必要があると感じている。

協働チームでは、中高生を真ん中におき、ジモト大学を推進していくことで、協働の輪を広げていきたいと考えた。お手元のパンフレットと3～5ページで詳細をお伝えする。「揖斐ジモト大学」では、全部で8つのプログラムを開催した。一般的な職業体験と違うのは、中高生と大人との対話に重点を置いていることである。

「みわ屋」の牧村さんからは、「普段から幅広くいろんなお菓子を食べ、おいしさを追求している」という話を聞き、高校生は「自分も苦手なものにもチャレンジしてみようと思った。」と、探求する面白さを感じたようだった。

大和神社でゲストハウスをオープンされた、神主の保井さんとは、かまどご飯など、町に残るさまざまなホンモノを体験し、高校生は「フランス人が求める本物が、揖斐川町に多くあることがわかった。」と、町の魅力・価値を感じてくれた。

「谷汲中央診療所」の西脇先生には、病院と違う地域医療の現場を聞き、「医療・介護は人を笑顔にできる大切な仕事だと気づき、自分もそんな仕事につきたいと思った」と、自分の将来に対する考えを深める機会になった。

「久保田工務店」の久保田さんからは、建設業の使命の話聞き、「現場で働いている人は、与えられた仕事をこなすのではなく、「こんな町にしたい」という具体的な思いをもって仕事していることを知った。」と、仕事のやりがい学んだ。

続いて、6、7ページでアンケートの結果をお伝えする。今回の参加者は、延べ47名で、7割は揖斐高校生だった。揖斐川町と揖斐高校は、連携型の中高一貫教育が根付いており、地域と高校のつながりが深まってきている。

7ページにあるように、「自分の将来を考えることができたか」との質問に対し、ほとんどの生徒が「そう思う」と回答し、自由記載欄では前向きな意見が多く出された。

ジモト大学は、高校生が地域の大人から仕事や生き方を学ぶ場である。学校だけでなく、学びの場を地域へと広げ、地域全体で、次世代の子どもたちを育てていく。ジモト大学は、大人自身がそんな魅力ある地域を作る、大人自身の学びの場であると感じている。

来年度、揖斐ジモト大学は、対象を西濃圏域の高校生に広げ、揖斐川町という学びのフィールドに、西濃圏域全体から高校生を招き、魅力ある大人たちから、自分自身の学びを得てほしいと考えている。この取組みが、関係人口の広がりや、揖斐川町で暮らしたいというきっかけにもつながると期待している。また、長い時間をかけた活動をプログラムに加えていきたい。地域探究部といったような部活動のイメージで、地域の課題について、高校生が一から向かい、探究し、高校生自身でプロジェクトをつくりあげるといった主体性や協働

	<p>性を育む経験である。引き続き、高校生との深い学びを広げていきたいと考えている。</p> <p>(揖斐高校生徒)</p> <p>私は、「お菓子でみんなを笑顔に」という講座に参加した。揖斐川町にある「みわ屋」で貴重な体験をさせていただいた。この講座は、夏休みに行われたため、夏をイメージしてスイカの形をした和菓子を作る体験をした。和菓子には、派手さはないが、綺麗で少し高級なお菓子というイメージをもっており、あまり好んで食べてこなかった。しかし、今回作った和菓子は、見た目は可愛く、おいしく、私の中で和菓子のイメージが大きく変わった。</p> <p>また、「みわ屋」は、地元産のものを多く使い、地産地消の取組みを行っている。これは、揖斐川町の良さを広める取組みであり、「みわ屋」の良さと言える。この学習を通して、自分のやりたいことを見つけ、その仕事を長く続けられるようたくさん知識を得たり、たくさん努力したりすることが大切ということ学んだ。人生において、就職先の決定は、とても大切な選択であることをわかっていたつもりだったが、実際に働いている人の話を聞くことで、その重要さをより一層リアルに感じる事ができた。</p> <p>また、その他にも4つのことを学んだ。一つ目は、一度きりの人生、やりたいことを仕事に。二つ目は、一度仕事を始めたらそれを変えることは難しい。三つ目は、たくさん挑戦し、経験すること。四つ目は、本当に自分がやりたいことを見つけそれに向かって努力すること。今回の学習を生かし、たくさん勉強し、本当に自分がやりたい仕事を見つけ、自分が一生頑張っていける仕事を見つけない。また、自分のためになることと同じくらい、人のためになるような仕事に就きたい。今回、講座に参加できてとてもよかった。機会があれば、また参加したい。</p>
意見交換	
稲本委員	<p>地域での活動を通じて自分の将来を本気で考えるきっかけになったというのは、とても重要なこと。</p> <p>ジモト大学の取組みはとても良いが、スローガンは、「A1に負けない」ではなく、「A1も活用し、A1も取り込もう」くらいの方が良いと思う。</p>
竹中委員	<p>この取組みに参加した地元の企業や診療所の方も生徒と一緒に取り組むことで、自分たちがもっているプライドや思いを伝え、何のために仕事をしているのか見直すきっかけにもなったと思う。地域の活性化につながると思う。</p>
野原委員	<p>昔は、子どもの周りにいるたくさんの大人と関わりながら育ったが、今は、こうした取組みを計画しないと、なかなか大人と話し合ったり、仕事を見聞きしたりする経験ができない。郡上北高校や揖斐高校の皆さんは、こうした取組みを通じて、未来の夢に向かって自分たちの意見、経験を膨らませることができたのではないかと。</p> <p>親や親戚の人だけでなく、普段出会うことができない経験を自ら求め、夢が広がっていくことは素晴らしいと思う。こうした取組みを後輩に伝えてほしい。</p>
近藤委員	<p>郡上北高校の取組みについて質問だが、中高連携の取組みについて、白鳥中学校以外の中学校から進学した生徒の取組みへの参加状況はどうか。</p>

郡上北高校 生徒	出身中学校に関わらず、みんなで白鳥中学校を支援している。
稲本委員	「カレーは飲み物」や「鮎茶漬け」は、レベルの高い商品ができれば、産業になる。特に、鮎は世界レベルのプロジェクトに向けて頑張ってもらいたい。
竹中委員	郡上北高校の生徒272名は、積極的に参加してくれたか。市役所や民間をつなぐ窓口業務も行う必要があったのではないか。調整や話し合いに多くの時間が必要だったのではないか。
郡上北高校 生徒	今年度の1年生は、ほとんど全員が何かしらの地域活動に参加している。窓口は大変だが、地域の方と触れ合う機会が少ない中、触れ合いを通じていろいろな経験ができた。
森口委員	<p>私たちがワクワクするような発信力があり、とても楽しく聞かせてもらった。続けることは大変だが、無駄にはならないので、この気持ちを忘れずに進んでほしい。</p> <p>揖斐の取組みへのアンケートの集計に関して、自由記載の抜粋として、良い意見ばかりが記載されているが、「ややそう思う」「あまりそう思わない」との回答に関する意見があると、より前向きなエネルギーになると思う。</p>
知 事	<p>郡上北高校の取組みのテーマである「郡上の魅力 創造・発信！」は、県の来年度予算のスローガン「岐阜県の魅力 創造・発信」と同じであり、とても心強く思っている。</p> <p>鮎の話が出たが、タイ、ベトナム、シンガポールへの輸出が本格的に始まった。キャンペーンでは、鮎雑炊、塩焼きが好評。先日、タイのバンコクで、鮎の取扱店の認定1号店が決まった。ベトナムのハノイに本格的な鮎料理の店がオープンし、コースで約2万円だが結構にぎわっていた。次は、オーストラリアへの輸出を計画している。サンプルが大変好評だった。今、輸入制限を解いてもらうよう交渉中である。</p>
教職員の働き方改革プラン2019について	
清流の国 推進部長	次に、「教職員の働き方改革プラン2019について」、副教育長からプランの進捗状況をご報告した後、垂井町教育委員会教育長から事例をご紹介いただく。
副教育長	資料2-1により説明
垂井町 教育長 和田氏	<p>垂井町の取組みについてご報告させていただく。</p> <p>2ページをご覧いただきたい。昨年度より、文部科学省から「業務改善加速推進事業」の指定を受けている。垂井町には、9校の学校があり、モデル校を垂井小学校、不破中学校とした。2校とも、西濃地区の研修校である。組合関係者、学校事務職員等をメンバーに、垂井町業務改善推進委員会を設置し、KPIを定め、取組みを検討している。</p> <p>3ページをご覧いただきたい。KPIに3項目を掲げている。</p> <p>4ページをご覧いただきたい。月の平均時間外勤務時間である。12月までの状況を平成29年度と比較すると、約12.5%の削減となっている。</p>

5ページをご覧いただきたい。平均休暇取得日数については、目標を達成できた。8月11日から16日を完全学校閉庁日とし、日直も置かず、学校には誰も出てこない日としている。休みは取りやすくなっていると考えている。

6ページをご覧いただきたい。中学校の部活動について、達成率は87.7%である。運動部では、連盟、協会の試合が行われること、強化指定を受けている部活があることから100%に達しないという課題がある。

7ページをご覧いただきたい。部活について取組み前と現在の状況を比較した。部活動ガイドラインと、保護者主催のいわゆる保護者クラブの設置により、教員の部活動の指導時間は減少している。

8ページをご覧いただきたい。具体的な取組みを紹介させていただく。業務改善を自分の問題と捉え、自らの業務への取組み方や時間の使い方をコントロールする意識、セルフマネジメント意識を高めることが重要と捉え、業務改善推進委員会で共通理解をし、取り組んできた。

成果につながった取組みを紹介させていただく。9ページをご覧いただきたい。年度初めに町教育委員会と校長会の連名で、教職員宛の通知を出している。ここには、学校や学級担任がしなくてもよいこと、すべきことを具体的に示している。行わねばならない、あるいは、行った方がよいと思われていたことを皆で思い切って取りやめる励みになったと考えている。

10ページをご覧いただきたい。学級担任は、学級に関わる業務を自分で行わねばならないという強い意識がある。そこで、県の補助を受けて「スクール・サポート・スタッフ」を配置した。気軽に依頼できるよう工夫し、依頼する教職員が増えた。児童生徒のための時間が増えたという声や、「なくてはならない存在」だという声も聞いている。また、取組みを通じて、小規模校にこそ、必要であるということも分かってきたので、来年度は全学校に配置すべく準備しているところである。

11ページをご覧いただきたい。業務改善を進めるにあたり、保護者や地域の方の理解や協力が必要不可欠だと考えている。中には、厳しい勤務条件で生活されている方が多数おられると思うので、趣旨や目的などを丁寧に説明するリーフレットを作成し、配布した。教職員には、保護者や地域の協力を得て、働き方改革が進んでいることを自覚してもらう意味も込めている。

12ページをご覧いただきたい。昨年度は、業務改善アドバイザーの講話を町内全教職員が聞いた。今年度が、コクヨ株式会社・ワークスタイル研究所により、業務改善アドバイザーを招聘し、モデル校でのヒアリングを行っていただいた。「これ以上何をすればよいか分からない」といった戸惑いや、学校現場が抱える課題が明らかになってきた。そこで、モデル校2校の全教職員が集まり、業務改善アドバイザーの指導を受けた。アドバイザーの講話をもとに、課題解決のための取組みについて熟議した。職員室に戻って、早速整理整頓する姿が見られたと聞いている。

13ページをご覧いただきたい。児童生徒と向き合う時間が十分とれているという教職員が増えているほか、教職員の声の一部を掲載している。

14ページをご覧いただきたい。どの年代のどの立場の教職員に聞いても、意識は向上していると捉えている。

15ページをご覧いただきたい。給特法の改正により、月45時間年間360時間を基準とする教育委員会規則を定めなければならない。今ご説明したとおり、ハードルは高いというのが実情である。次年度に向けて、町内すべての学校をコミュニティ・スクールとするほか、校務支援システムも本格的に

	<p>運用したいと考えている。ここで示した内容に、各学校で見直しに取り組んでいきたい。来年度も業務改善推進委員会を中心に、不断の見直しを行っていききたい。</p>
意見交換	
稲本委員	<p>基本的な問題として、働き方改革を実行するには、質を高める必要がある。質を高めないと量を減らすことはできない。</p> <p>部活動以外の業務量を減らすには、ふるさと教育の推進による地域の人々の活用や、ICTの活用による授業の準備時間の短縮を図ることが有効。</p> <p>先生は「休んだら何をしたらよいか分からない。休むくらいなら働きたい。」という人も多い。休むことで質を高めるといふ頭の回路を作ることが重要。</p>
竹中委員	<p>働き方改革においては、時間を厳しく管理する必要がある。日本の生産性は、先進国で最下位。労働生産性も半分程度であり、過重労働の撲滅が必要。分析が進み、時間外勤務の原因は部活動が多いことが判明し、良い方向に向かっていると思う。</p> <p>働き方改革を進めるにあたり、業務改善アドバイザーを取り入れているので良い仕分けが行われるのではないかと期待しているが、教育現場におけるアウトプットは何か。生徒と向き合う時間も重要なことと思うが、明確にする必要がある。そして、それに向けて、ICT等を活用し、中身のある質の高い教育制度に変えていく必要がある。第一段階としては良い方向に向かっていると思う。</p>
垂井町 教育長 和田氏	<p>メリハリをつけた勤務という観点では、岐阜市もそうだが、土曜日に授業を行っているため、その振替を夏休みにまとめて取っている。</p> <p>ICTは、働き方改革に十分役立つと考えている。ICT環境の整備がなかなか進んでいかない面もあるが、大型液晶テレビやデジタル教科書等により、教材を作成する時間が省け、視覚に訴える教材提示ができるなど、より効率的に授業を進められるので、さらに有効活用していきたい。</p>
竹中委員	<p>少子化により、各学校の人数も減っていき、クラス編成が困難になることも予想される。遠隔授業、専門性を高める授業が必要。</p>
稲本委員	<p>ふるさと教育やICT教育を浸透させるには、教育実習校における教育実習でやるべき。負担が大きすぎるのであれば問題だが、岐阜市のいじめの問題で、教育実習校の先生の勤務について話題となっているが、因果関係がはっきりしない議論を進めるのは意味がない。</p> <p>何をやれば何が良くなるか。この点を議論しながら進める必要がある。制度を変えただけで変わらぬと思うのは間違いであり、常に内容を議論する必要がある。</p> <p>先ほどの高校生の発表のように、地域の人や生徒の意識が変わることで、教育する側の教師や教育委員会も改革が進むきっかけになると思う。</p>
森口委員	<p>意識改革の中で無駄なことを省いていくことは、ある程度までは、わかりやすい業務内容の精査ができる。</p> <p>しかし、さらに踏み込むと、学校現場では、授業時間や部活動の問題が出て</p>

	<p>くる。部活動は、外部指導員の活用により負担は軽減されるが、顧問は部活動の時間をもつことになる。</p> <p>見直しにあたっては、人によってメリット、デメリットがあるので、何年かかけて見直し、シャッフルしなければならないことも出てくると思う。</p> <p>忙しいことと子どもに対する気づきは別のものであり、子どもに対して触覚を鋭くする必要がある。もし、その人が気づかなければ、学校の中でどう連携をとっていくのか。先生同士の交流なのか、風通しを良くしないと滞ってしまうことがある。時間がある、なしでわかるわけではないことを強く言いたい。</p>
垂井町 教育長 和田氏	<p>おっしゃるとおりであり、ジレンマの中で動いており、「随分進んだ」という声がある反面、「まだ進んでいない」という声もある。この辺りを追究していくと、学校のミドルリーダーとして質の向上のため、踏ん張る教員がいることを表しているのだろう。学校全体を動かしているという意気を感じてでのことと思うが、人数が少ないこともあり、業務がうまく配分できていないのではと思う。しかし、これまでやって当たり前と思われていたことを見直すことが重要で、そういう見方をもつこと自体が教育の質の向上につながると思う。</p>
近藤委員	<p>業務改善アドバイザーとスクール・サポート・スタッフは非常によい取り組みである。学校に行くと、上の方に物が積まれており、危険だと感じることもある。中からは意見が出しづらいこともあるので、外部の視点である業務改善アドバイザーの意見を取り入れやすいのだと思う。スクール・サポート・スタッフについても、印刷業務などの事務的な作業が減ると、若い先生が先輩教師と話す時間が生まれ、話の中からの学びを得られたり、アンテナを高くしたりすることや子どもを見るときポイントなどを学ぶことができる。すぐに成果はでないと思うが、徐々に質が上がっていくとよいと思う。</p>
教育長	<p>ふるさと教育は、学校だけの教育では成り立たない。学校がいかに外部の力を取り込んで子どもたちを育てていくか。これまでグループ1、グループ2で取り組んできたものが、今はふるさと教育として取り組んでいる。先生が地域資源に気づき、地域との連携が進むこともあるので、こうした取り組みをさらに進めていきたい。</p> <p>働き方改革については、教員全員の意識として、必要性を感じてもらうことが重要である。いかに理解を高め、取り組んでいただくか、現場の声も聞きながら取り組んでいくことが大切であると思う。</p>
知事	<p>働き方改革による時間削減については、どんどん厳しいターゲットが設定されており、逆に子どもと触れ合う時間まで減らしてしまっているのではないかと感じる。</p> <p>また、業務の外部活用も大切だが、行き過ぎは良くない。経験上、仕事を進める中で、雑事が9割、意味のある仕事は1割だと思っている。9割の雑事をこなすことで1割の意味ある仕事のヒントや気づきになっていることもある。雑事だからといって何でも誰かに任せ、エッセンスだけを追うことになっては宜しくないと思う。</p> <p>教育実習校や研修校の制度といじめの関係は、これこそが切り札と言わんばかりの議論をする人がいるが、教育実習校や研修校は教師を育てるためにあるものである。問題があれば見直し、改革もすればよいが、制度そのものがいじめにつながっているという議論は短絡的な感がある。</p>

清流の国
推進部長

これをもって本日の会議を終了する。